

コロナ禍からの再始動

－ SRP がつなぐ学生協働の20年－

鎌原美枝子

1. はじめに

創価大学には、学生有志と図書館職員が協働で読書推進に取り組む団体「Soka Reading Project（以下、SRP）」があります。2006年の発足から本年で20周年の節目を迎えました。

本稿では、コロナ禍を経て活動実態がほぼついていた危機的な状況から、どのように学生協働を再建したかを中心に、本学SRPの歩みを紹介します。

2. 読書運動SBWと学生協働SRPの役割

本学では「全学に読書の波を起こす」ことを目指し、2005年より全学読書運動「Soka Book Wave（以下、

SBW）」を展開しています。SBWが始まった2005年は文字・活字文化振興法が制定・施行されるなど、社会的に活字文化への注目が集まった年でもありました。

SBWでは読書感想文の投稿や対象の図書館イベントへの参加によりSBWポイントが付与され、50ポイン

トで500円分の図書カードと交換できます。感想文は大学院生が添削・助言したうえで、本人の同意があればOPAC上に公開されます。読後のアウトプットを通じて、理解の深化と文章力の向上を目指しています（図1）。

学生協働団体であるSRPは2006年、この全学読書運動SBWを学生主体で推進していくことを目的に発足しました。学部生の希望者と図書館職員とが協力し、図書館でのおすすめ本展示やビブリアバトルをはじめとするイベント運営を重ね、本学読書運動の中心的役割を担い続けてきました。



図1. Soka Book Waveの仕組み

3. コロナ禍からの再始動

しかし、2020年、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により学生の活動が停止。筆者が図書館に着任した2022年、唯一のメンバーも留学中で、活動実態は「ゼロ」という休止状態に陥っていました。ここからの4年間、どのように立て直し、学生協働を再び軌道に乗せたのか、その歩みを年次ごとに振り返って紹介します。

【再始動1年目：再募集と中核づくり】

2022年夏、活動再開に向けて学内ポータルサイトからメンバーの再募集を行いました。学年・学部不問、他団体との掛け持ちも歓迎、「図書館を盛り上げる」ことに関心のある学生を募ったところ、8名が集まりました。幸運なことに再募集の過程で、かつての活動を知る唯一のメンバーが秋に留学から帰国。連絡を取ると「また一から作り上げる気持ちで活動したい」と力強い返事がありました。SRPの活動を知る学生が中核として復帰したことで再始動に向けた見通しが立ちました。

この年は読書会や展示を数回行う小さな再開に留まりましたが、3名が「翌年度もSRPで活動したい」と継続を表明してくれました。

【2年目：イベントごとに「中心者」を置く】

翌2023年度は、次年度に学生リーダーを立てることを目標に、「集まりは少なくとも週1回顔を合わせる場をつくる」ため、職員中心に定例会を実施しました。

この年に工夫したのは、読書イベントごとに「中心者」を置いたことです。これにより、学生が主体者としての自覚を持ちやすくなりました。また、附属図書館運営委員会の

教員にすすめ本をインタビューし、POPカードを作成して展示する取り組みも行いました。秋の大学祭では4年ぶりに「読書展」を開催し、地域の方や卒業生にも活動を知ってもらう機会となりました。この年には、学内でビブリオバトルも再開しています。

職員としては、図書館総合展や各種フォーラムなどに積極的に参加し、他大学の先進事例を学びました。「いつか学生とともに図書館総合展に出展したい。他大学の学生と交流したい」と、未来像を具体的に思い描きながら歩みを進めました。

【3年目：学生リーダーの誕生と活動の拡大】

転機が訪れたのは再始動3年目の2024年度です。前年度にイベントの中心者を担った学生が年間リーダーを引き受けてくれ、待望の学生リーダーが誕生しました。活動をSNSで発信するためInstagramアカウントを開設し、定例会も週2回に増えたことで、学生同士が主体的に動けるようになりました。秋の大学祭では「創価大学図書館の大冒険」と題した展示と宝探しのイベントを開催。世代を超えて1,200名超の来館者を迎えました。さらに、図書館総合展の「学生協働サミット」で初めて活動報告を行い、他大学との接点が増えました。自分たちの活動に誇りと手応えを実感できた一年です。

職員は学生の打ち合わせや作業には極力同席し、相談しやすい距離感を維持しつつ、できるだけ学生中心で進められるようなサポートを心がけました。そのなかで、学生は自主的に後輩たちのためのマニュアル作成や、自らが所属する他団体へSRPの魅力をアピールするなど、次年度につながる積極的な活動を展開してくれ、大変心強く感じました。

【4年目～現在：他団体との交流と知名度向上】

再始動から4年が経過した昨年2025年度は、学生リーダー1名、副リーダー2名を中心に、メンバー計33名の体制にまで発展しました。年間12回の読書イベントや図書展示などの活動のほか、新たな挑戦として、全国大学ビブリオバトル予選会の主催や、図書館総合展でのポスターセッション発表も実施。交流を通じて、幅広いコミュニティの輪を築くことができました。さらに、大学キャンパスガイドへの掲載や各学内団体とのコラボレーション、ウェブメディア「朝日新聞Thinkキャンパス」での紹介などにより、SRPの知名度も向上しました。学生とともに運用しているInstagramでの広報活動も好評をいただいています(図2)。

【外部連携がもたらした出会い】

活動の幅が広がるにつれ、外部の力にも大いに支えられてきました。

書評専門紙『週刊読書人』のコラム「書評キャンパス」への投稿推進や、株式会社読書人と日本財団の協



図2. 学生が制作したビブリオバトル説明マンガ。イラストが得意な学生が展示や広報用ポスター制作も担当。

力による「読書人カレッジ」事業に継続的に参加し、作家・書評家など文筆の世界で活躍する方々に読書講演会の講師をお願いすることもできました。こうした出会いは、イベントの運営に携わった学生にとっても大きな刺激となり、図書館で活動する意義を実感する契機になりました。

4. 学生協働を続ける意義

実質的な活動実態ゼロからの再始動を経て痛感したのは、人が少ない時も「続ける」ことの価値、そして学生の自主性を信じて待つことの大切さです。そうしたなか、本年3月、再始動期からSRPに所属してきた学生が大学卒業を迎え、次のように語ってくれました。

「活動を通じて図書館が私の居場所となり、SRPは大きな支えとなりました。就職面接の場でもSRPの経験に関心を寄せていただき、これまでの努力が自信に変わりました。本を通じて多くの方とつながれたことは私の大学生活の宝物です。後輩たちには、これからもアットホームな雰囲気大切にしながら活動を続けていってほしいです」。

学生協働の魅力の一つは、学生が主体となることで図書館の存在や読書運動が「自分事」になる点にあると考えています。教職員がどれほど熱心に企画しても、学生同士がつくる場の力には及びません。学生が図書館の運営に携わることで、職員側も多くの学びを得ており、学生に心から感謝しています(写真)。

SRPに参加する学生は、必ずしも読書家ばかりではありません。「本を読めるようになりたい」「図書館に通う習慣をつけたい」といった動機で参加する学生もいます。なかには高校時代はほとんど本を読まなかった学生が、活動を通して本に触れる機会が増え、年間100冊を読むまでに成



写真. 2025年秋の大学祭で開催したイベントの様子。参加者はクイズに答えながら図書館を巡り、SRPの学生と職員が協力して来館者対応を行いました。

長したケースもありました。学生協働を続けてきたからこそ、SRPという場が仲間と出会い、学生の可能性を広げる存在になっている——職員としてこれほど嬉しいことはありません。

[NDC10:0177

BSH: 1. 創価大学附属図書館 2. 読書]

5. おわりに

最後に、今日までに他大学の学生協働団体担当者をはじめ、多くの方々から情報交換の機会をいただきました。この場をお借りして、本学の読書運動を支えてくださっているすべての皆さまに心より感謝申し上げます。

今後もSRPの学生とともに、教職員、地域の方々、そして図書館業界の皆さまと連携し、活字文化の復興の一翼を担えるよう努めてまいります。

参考 URL

- ・ 創価大学附属図書館ウェブサイト
<https://lib.soka.ac.jp/>
- ・ Soka Book Wave ウェブサイト
<https://lib.soka.ac.jp/sbw/>
- ・ Soka Reading Project Instagram
https://www.instagram.com/soka_library_srp/

(かまはら みえこ :

創価大学附属図書館)